

韓日間の相互認識と展望

——望ましい関係定立のための提言——

姜 昌 一

〔注〕

本稿は、一九九七年九月二五日、「政治文化の視点に基づく二一世紀における日韓共生の構図」プロジェクト（代表研究員・田中靖政）の企画として行われた公開講演会の発表をもとにしています。掲載が大変遅れてしまったことをお詫び申し上げます。

一 はじめに

ご紹介していただいた姜昌一と申します。近代日韓・韓日の相互認識、そのあたりが私の主要なテーマですが、この席では現在の相互認識の問題を中心にして申し上げたいと思います。

今現在、日本と韓国の間には相互認識という観念上のことから政治的・経済的領域までわたってさまざまな問題があります。不信と嫌悪、誤解と差別、歴史的事実に反する韓日協定の問題、「過去清算」の問題など枚挙できないほどです。

韓国と日本は隣の国ですが、お互いにも知らなすぎる。相互認識といってもそれは感情的レベルであって、科学的・合理的認識がなされていないんじゃないかと思えます。私は留学して東京大学文学部で東洋史を専攻しましたが、東京大学東洋史学科で朝鮮史を勉強する人が何人かと思ってみたら、本当に少ないんです。戦後にあって、五年に一人出るか、出ないか、というぐらいです。例えばこれが、韓国についてあまりにも関心がないというのを立証する事実ではないでしょうか。韓国について関心がないのは当然なことかも知れません。

韓国の側がどうかと言えば、もっとひどいんです。たとえば一九六〇年代から七〇年代まで大学で日本史講座が設けられていませんでした。日本史を研究しようとする者が七〇年代に二人いましたが、米國に留学したのです。日本史を勉強するのに、日本ではなくて米國にです。それで帰国して一人は今ソウル大学教授をやっているし、一人は延世大学教授をしている。その後、何年か経って、一人が日本に留学して勉強し、高麗大学教授をやっています。

それから八〇年代になって、多くの学生が日本に来ました。東大の国史学科に留学した三人が帰国して現在大学教授をやっています。それから今、一〇人ぐらいが東大で勉強しています。つまり韓国はいろいろな意味で日本を無視することができないのに、二〇年前までは研究者があまり出ず、最近になって急に増えているという状況です。これは端的に両国の関係が正常ではなかったことを立証する事例であるといえます。もちろんここには日韓間の教育政策の問題も横たわっているし、また相互認識の問題も絡んでいます。それにしても不思議な関係であり、正常

な関係ではありません。韓国が解放されてから、すなわち日本が敗戦の後、韓日関係がちょっと正常な関係ではなくて、誤った道を歩いてきたんじゃないかという気がします。

日本での経験ですが、二か月前、ある日本人の家に招待されてお邪魔しました。招待してくれた方は五〇代で兄貴のように親しい方ですが、そこには八〇歳ぐらいのおばあさんと二〇代の息子たちがいました。ところが、韓国についてのイメージがみんな違うんですね。八〇歳の方は、長野県出身ですが、韓国人について植民地時代の認識をずっと持ってきたんだそうです。長い間差別と蔑視の感情を持ってきたが、実際に韓国人とつきあってみたら、違うと思ったんだそうです。今、二〇代の孫の場合はソウルオリンピックをテレビで見たことがあって、「韓国はすごい国じゃないか」と言う。このように一つの家族の中でも韓国に対する認識が互いに違います。

世代毎に認識が違うのは韓国の場合も同じです。たとえば、六〇年代に大学に入った世代と新世代といわれる二〇代の若者とは日本をみる目が非常に違うと思われれます。

一応、時期により、世代により相互認識が違うと言うことを前提にしながら述べていきます。互いにだんだんと正しい認識になってきつつあるとは言えますが、まだまだ不信と嫌悪、誤解と差別感是很強く残っていると思います。これは韓日両国が新しい関係を作る時、「過去」の問題が常識的なレベルで清算されなまま残ってしまったからであると言えます。つまるところ、一九六五年「韓日協定」を締結して新しい関係を結ぶ時、両国政府は歴史的眞実と常識を無視して現実的利益ばかりを狙ってしまったのです。これが今までずっと両国の人々が互いに不信感を持った根本的要因ではないかと思われれます。

私には日本人の友達がたくさんいるし、日本人を尊敬し愛しています。それでも、日本という国のあり方は、本当に私でさえあまり理解ができない。それで、私が韓国で日本について批判すると、日本からは反日主義者と、変

な非難をされます。

そういうのを本当に反日主義者と言うのでしょうか。私は日本についてよく批判しますが、それは望ましい日韓関係を作るためです。それだけではなく韓国側に問題があればそれもやはり批判しています。昨日も韓国のKBSから新ガイドラインについての電話インタビューがありました。中国の場合は新ガイドラインについてすぐ抗議します。ちゃんとした対日政策を持っているからでしょう。ところが、韓国政府はひとことのコメントさえしないんです。韓国はまったく対日政策がないからでしょう。新ガイドラインの場合、ジレンマかもしれません。それは北朝鮮に対する戦争抑制の機能もある反面、日本の軍事大国化でもあるからです。日本の軍事大国化、それをどうすればよいのか、それに対する、ちゃんとした政策があるのか、無ければそれは批判されて当然なことなんです。韓国の対日本政策というのは無政策といってもいいくらいです。

以上話してきたように現在の日韓関係には、いろいろな問題点が山積みになっています。

二 解放以後の韓国における日本認識

レジュメに、主要事件を書いた年表がありますが(102〜103頁参照)、これを参考にしていただきたいと思っています。一九四八年、朝鮮は南北が分断されたのですが、この分断のせいで韓国では「親日派」の清算ができなかったんです。新たに解放された国だったら売国附日の「親日派」を清算するのは当たり前なんです。ここで括弧付き「親日派」という言葉ですが、今は一応韓国でよく使うこの用語を使っていきたいと思えます。

植民地権力に従って働いた人々、それも下級の人ではなくて、上で積極的に主体的に植民地権力に従って働いた

人々に対しては、「植民地支配から」解放した国家や社会では、整理するのが当然なことです。冷戦構造と分断体制のために南ではできなかったんです。そして「親日派」が再登場するようになりまし。北にも多くの「親日派」といわれる人がいましたが、北では一応、清算・粛清されました。彼等は弾圧されて南に渡り、反共運動の先頭に立って活動するようにもなります。

その後、韓国戦争（朝鮮戦争）が勃発し、それから一九六一年、朴正熙の軍事クーデターが起こったんです。朴正熙という方は典型的な「親日派」です。彼は日本の陸軍士官学校出身で、徹底的な「皇国臣民」教育を受けた人なんです。彼が軍事クーデターを通して国家権力を握ってから、「親日派」といわれる人々が権力の前面に立つようになります。朴正熙の二〇年間の政策をずっと見ていくと、旧日本のそれをまねしていることがわかります。戦時統制体制を模倣して維新体制（一九七二年）をつくるし、満洲国をモデルにして韓国の経済を発展させようとしてます。韓国の農村を発展させたとよくいわれる「セマウル運動」も、実際は一九三〇年代の農村振興運動を真似てやったと思われま。

韓国と日本は一九六五年に日韓・韓日条約を締結して新しく国交が再開されたのですが、これが本当に問題です。「過去清算」課題を解決しなければならなかったのですが、実際には常識と歴史的な事実に戻すものになってしまったんです。基本条約で「一九一〇年八月二二日及びその以前に大韓帝国と日本帝国の間に締結されたすべての条約と協定はもはや無効であることを確認する」というくだりがあります。これは当時の日本政府側の説明のように、一九四八年八月一五日大韓民国が樹立される時までは、この協定は有効であり植民地支配は合法的であることの意味するものです。それから請求権協定では日本側が「経済協力資金」三億ドルを提供することで、両国と両国民の請求権が「完全にかつ最終的に解決されたことを確認する」としてしまったのです。これは歴史的な事実に戻

するものであり、個人の請求権さえも法律的に源泉的に封鎖したことになります。政治家たちが過去の問題を政治的に利用したのです。だからその後の両国関係では、国民レベルでの相互不信が解けず、おかしな関係がずっと続いていると思うんです。

韓日条約がそのまま有効である限り「過去清算」の課題は解決できないんです。国際的な非難を受けている「慰安婦」の問題もそうです。歴史認識の問題と同じく、形式論理によれば韓日条約ですでに解決されたとしても仕方がないんです。国際法の解釈においては、個人の請求権（私的請求権）が国家間の条約で解消できないという解釈もあります。日本の国内法ではいまでもできません。その状況が日本のジレンマではないかと思うんです。つまり韓日条約によってよくない関係、誤った関係が始まったと思うんです。

維新体制が続き、一九七三年と七四年には、金大中拉致事件、文世光事件（朴正熙大統領夫人の暗殺事件）があり、韓国で反日感情はさらに高揚しました。一九八〇年に全斗煥軍事政権が登場しますが、彼等は「ハングル世代」という、日帝の教育を受けなかった若い人々を中心になって権力を握り、以前の「親日派」と言われる人々は権力の前面から追い出されました。軍隊の場合もそうです。日本政策を担当するブレインたちも、大体若い人々、四・一九世代とか、六・三世代とか、いわゆるハングル世代でしたが、彼等は六、七〇年代に日本に留学したりあるいは新聞社の特派員として勤めた経験がありました。その時、彼等は「克日論」というスローガンを出します。日本に克つという、そういう雰囲気でありました。国粋主義といえるでしょう。

その後、韓国と日本の間に教科書問題が起こりますが、これをきっかけにして反日的な雰囲気も国民的次元でもっと高まるんです。全国的な誠金によって独立記念館が作られたほどです。ところで、政府側で積極的に反日雰囲気を煽った側面がありますが、これは日本から経済的な支援をもらうためでありました。実際に全斗煥大統領は

日本を訪問してその雰囲気に乗じて四五億のお金を借りて帰ります。

一九八八年にソウルオリンピックがありました。これは日本人にとっての韓国認識の転換点になったと思われ
ます。私はその時ちょうど日本に留学していたんです。マスコミを通じて韓国も素晴らしい国、成長した国と報道
され、新たなイメージがつくられるようになりました。特に若い人々に差別とか蔑視感がなくなり、日本と同じレ
ベルの「すばらしい隣国」というイメージが作られはじめました。そういう意味でオリンピックというのは一つの
転換点になったんじゃないかと思えます。

八九年には軍「慰安婦」の問題が出まして、韓国でいろいろ反日運動、反日雰囲気、反日感情が強くなりました。
それから一九九五年は、日本の敗戦と韓国の解放五〇周年に当たりますが、韓国では五〇周年という一応の区切り
をどうするかということで、日本問題が表面化しました。ちょうど同じ頃、日本でも敗戦五〇周年問題が、いろい
ろ複雑に展開され、その時、右傾的な政治家とか知識人によって妄言が飛び出しました。妄言問題から、韓国では
反日雰囲気が出して、今までずっと続いているといえます。

ところで、若い人々は混乱してしまってます。マスコミでは「日本は悪い国」としてよく宣伝されます。実際に
は交流がだんだん深くなって、日本によく来ますし、日本の学生たちもよく来ています。日本人とつき合ってみ
たら、すばらしくて親切だという印象を持つようになったり、日本に行ってみたら本当に発展したすばらしい国であ
る。それなのに、マスコミでは「日本が悪い、日本は悪玉」としている。相反するイメージが作られ頭が混乱して
しまいます。現実と観念、意識と感情、それが複雑に混じって、錯綜しているんじゃないかと思えます。それは国
民総体的レベルでもいえるんですが、一人の人間の中でも日本人像が錯綜しているといえます。

最近日本に来てみたら、普通の日本人の北に対する感情は、現在の食料問題もあって、嫌悪感とか、蔑視感が前

よりもっと強くなったと感じられました。「親韓国、反北朝鮮」、そういう雰囲気があると思われれます。一九六〇年代、七〇年代は北にたいして親しみとか憧れがあったと聞きました。その反面、南については嫌悪感を持っていたのが、最近では完全に変わって、南のほうには親しみを感じる一方、北については嫌悪感を感じるようになったということでしょう。もちろん、日本人でも人によって違うんですが、一般的な流れであるという気がします。

さてこれからは、解放以後の韓国における日本認識はどうであったのかを世代別に簡単に申し上げたいと思います。

第一世代というのは、成人として植民地を経験した世代です。この世代には民族解放運動を行った人もいますし、日帝に協力したいわゆる「親日派」もいます。東西冷戦構造と南北分断体制が作られる中で、近代的な教育を受けた近代的な知識を身につけた「親日派」が、政治と社会の指導層として登場することになったということは前で説明した通りです。彼等は感情的で虚偽的な反日主義を掲げて国民を教育しました。彼等には日本についてのいろいろな憧れもあるし、劣等感もあるし、複雑です。そのような精神状態が虚偽的で観念的な反日観念をつくり、それをもって反日教育をします。そうすれば日本についての客観的な科学的な認識と理解は不可能になります。「天皇陛下万歳」を叫んだ人々が、反日の先頭に立って反日教育を行う状態でありました。たとえば、歴史学の分野でも満鉄調査部で働いた者が文教部の長官やソウル大学の教授をやって反日教育の先鋒に立ちます。彼は韓国の近代史を書きましたが、事実に基づかず、感情を煽る、そういう歴史叙述でありました。五〇年代の歴史教育というのは大体「親日派」といわれる人によってなされるんですが、そういう歴史教育は正しい日本認識とはほど遠いもので、反日を主張することは、かえって自分の罪とコンプレックスの裏返しでした。

次に、第二世代あるいはハンゲル世代は、一九六〇年代の四・一九世代と六・三世代を指しますが、一九六〇年

の四・一九学生運動と一九六四、五年の韓日条約に反対した学生の世代です。その時はちょうどナショナルリズムが高揚した時期なんです。このナショナルリズムには様々な流れがありますが、反日親米的な雰囲気为主流といえます。学校で感情的な反日教育を受けて、米国を重視し日本を軽視する世代です。さきほどお話ししたように、六〇年代には日本史研究のためにも米国に留学するほどでした。

第三の世代とは、一九七〇年代に大学に入った人を指すと思うんですが、この世代はちょうど日本が経済成長して経済大国となったので、日本に対する関心が本当に強くなるんです。関心が高揚して、そのとき「知日論」すなわち日本をちゃんとわかりたい、知りたい、という雰囲気がありました。政策の側面では日本をモデルにするし、政治経済的な側面ではいろいろ日本と深く関係を結ぶんです。日本留学生もだんだん増えます。この世代は、小学校の教育を一九五〇年、六〇年代初めに受けたので、感情的かつ観念的反日性が強く身についていると思います。成功した日本についての憧れもあつたんでしょう。相互矛盾する観念と認識が混在しているといえます。また、その時期は韓国も経済的に成長している時でした。政治的には権威主義独裁政権があつて学生運動とか民主運動が盛んになった時期でもありました。歴史認識についていえば、きちんとした教育を受けていないので、あまりよくわからない、無知の世代ですが、好奇心と関心は強い世代と言えます。

第四世代とは、いま韓国で「X世代」といわれる二〇代ですが、日本でいえば「新人類」でしょう。彼等は過去の歴史にあまり関心がなく、知らないか、そうでなければ脱歴史的な認識をもっているか、歴史不感症の世代といえますかね。彼等にとつて植民地というのは、昔話になってしまふんです。われわれの世代は、両親たちがみんな植民地時代の経験がありますし、徹底的な反日教育を受けたので客観的に他者として日本を認識する事ができなかつたんです。ところが、第四世代の場合は大体第一世代と第二世代の両親から、一九七〇年代に生まれた世代です。

戦後（韓国戦争以後）生まれで観念的反日主義の持ち主の両親からは、直接的日本体験を聞いたことがなく、朴正熙政権の親日的な教育を受け、「成功した日本」を経験しながら成長したのです。いわゆる「日本羨望論」の持ち主です。彼等の脱歴史的な日本認識がかならずしも悪いとはいえないんですが、主体性があまりなく、科学的な日本認識ではなく感覚的に日本を見るので、それもある面では危険性をもっているといえます。彼等は後で真剣に歴史勉強をするようになり、過去の歴史がわかるようになると混乱してしまいます。観念と現実の乖離、意識と感情の混乱の状態ではないかと思えます。

私は大学で「日本論」を講義しているんですが、彼等に日本をどう思うかと聞けば、「日本は偉い国、大きな国だ」とか、「すばらしい国だから行きたい」とか、大体そういう反応です。彼等は韓国の普通の学生です。私はいい、悪いとは評価したくないんですが、韓国人の日本認識は、すべての面で矛盾していることが現在の問題であることを指摘しておきたいんです。世代ごとに日本観とか認識がそれぞれ違ったり、個人のレベルでも感情、意識、観念が矛盾しているのが問題ということです。

三 敗戦以後の日本人における韓国認識

敗戦以降の日本人の韓国認識は、皆様の方がよくご存じだと思いますけど、私が感じていることを若干お話しします。第一世代の場合はすなわち帝国時代の青壮年層ですが、彼等は敗戦後再び主役として登場します。一九四五年という時期が断絶点か連続点かというのは様々な分野で議論されていますが、一応、政治権力という面では連続的な性格が強いといえます。戦後にも、戦前の官僚たちが再び権力の前面に出てきます。たとえば、A級戦犯の岸信

介さんが首相にもなるし、戦前の官僚たちが再び登場して日本を引っ張っていくという政治構造です。それは教育ともつながるんです。それで、戦前の皇国臣民教育がある面では続けられるんです。彼等の世代は朝鮮人に対する蔑視と差別的認識を強くもっていると思います。その世代においては朝鮮は自己内部化されて、他者ではなくて自分の周辺として位置づけられることでしょう。

第二世代の場合、すなわち日本の敗戦の時、青少年であった世代で、多分皆様の世代になるんじゃないかと思うんですがね。差別・蔑視感とともに加害意識、加害者としての罪意識もあると思います。両面が混在、錯綜しているのではないかということです。たとえば、亡くなられた梶村秀樹先生（一九三五～一九八九年）の世代ですよね。梶村先生の場合、加害者意識と罪意識が強いです。「われわれが悪いことをやった」と。それで、運動に走ったと思うんです。

第三世代は戦後生まれで、いま中堅でしょう。この世代は韓国を他者として客観的に見ようとする傾向があると思います。それでもやっぱりこの世代は、欧米追隨的な教育と雰囲気です。育ったものから、一般的には韓国についてあまり知らないし、関心もない人が多いようです。海外旅行と言えば、韓国より米国とかヨーロッパに行きたい人々が多いんじゃないかと思うんです。

その次の第四世代、すなわち日本の経済復興が終わって高度産業社会の段階に入り、経済大国として基盤を作っていく時に生まれた世代ですが、彼等はアジアへの関心を強めていく傾向もあると思います。この時期、日本の主体性が強く問われる場合が出てきて、それでアジアに目を向ける、そういう雰囲気と流れがあったと言えます。米国、ヨーロッパ中心ではなくて日本のアイデンティティ、それがもって広まって、アジアというところまで広がる世代です。そうすると、交流も頻繁になるし、韓国についての認識も深くなります。親近感とともに他者としての

見方もできると思われます。

たとえば、朝鮮史研究者の場合にもこのような世代差はあると思います。以前の世代では加害者意識と罪意識に基づいて朝鮮史に関心を持つことになったという人が多いんですが、第四世代は好奇心がきっかけになる場合もあるんじゃないかと思います。

四 韓日間の懸案問題

これからは、日韓関係の懸案の問題について申し上げたいと思います。韓国と日本は不可分の関係にあります。運命的に離れようとしてもできない関係にあります。それは互いに信頼を基盤にした共生・共栄の同伴者となるのは運命的に与えられたものとも言えましょう。このプロジェクトで、この主題を選んだのもそういう問題意識があるからだと思います。

韓日関係は、長い間には悪い関係ばかりではなくよい時代もあったと思います。しかし近代に入ってから侵略と被侵略という望ましくない関係になってしまったんです。そしてその後も政治経済などの分野では新しい深い関係ができていくのに、感情と意識の中では不信感が強く残っていることは疑いをはさめない事実です。このようなおかしな関係はどうしてできたのでしょうか。それは要するに過去清算の課題がうまく解決されなかったからと言えます。

日本の敗戦後、両国が新しい関係を作ろうとしたら過去を清算しなければならぬ、歴史清算、それが必要だったんですが、結局はうやむやになってしまったんです。韓国では東西冷戦構造と分断体制の形成の中で、「反共」

が最高の国家イデオロギーとなりました。それで過去を問わずに反共勢力を活用することになり、植民地時代に日本帝国主義の下で働いた人々、いわゆる「親日派」が再登場して韓国社会を率いていくようになります。日本の場合も先に申し上げたように保守・右傾的な勢力が指導する国になりました。反共を最高のイデオロギーにしなから、皇国臣民教育を受けた両国の政治指導者たちは癒着して、歴史問題を政治的に利用してしまっただけです。経済的かつ政治的な目的で歴史真実と歴史清算の課題が利用されてしまったと言えるでしょう。前で説明したようにその典型的な事例が日韓、韓日条約です。

日本帝国が朝鮮を不法的に、そして武力によって侵略し、植民地として支配したのは常識的で歴史的な事実でしょう。それでもこのような反歴史的で非常識的な条約を結んで新たな関係が始められたんです。その時点ではうまく事を収められたかもしれませんが、それは今に至るまでずっと束縛となり、不信の根源となっております。たとえば現在、従軍慰安婦の問題で日本は国際的な非難をあびていますが、この条約が有効である限り、韓国の被害者にとって解決の道は閉ざされていると言ってもよいのです。

その後の政権も、韓日間の過去清算の問題を政治的に利用した点では同じであるといえます。一九八二年、教科書問題が起こった時、全斗煥政権は反日的雰囲気煽りながら日本を訪ねてお金を借りて帰ります。過去の問題を経済的・政治的に利用してしまっただけです。こういう政治的取引、これがいちばん問題だと思います。それで過去清算の課題が解決されないまま今までずっと残っているし、その内容を正確にわかっていない両国民の間では、「破廉恥な日本人」「うるさい韓国人」というイメージが再生産されていくことと思います。

韓国のマスコミで、日本の教科書問題や政治家の妄言が話題になり、いま韓日間の懸案問題になっています。それは、民族感情を刺激し、老若を問わず反日雰囲気が充満しています。となると、他者として日本を見ている若い

世代も、教科書で間接体験として習った日本についての記憶、四〇〇年前の壬辰倭乱までさかのぼって、残酷で野蛮な日本人像がまた再生されます。それは重層的に重なり観念化されていきます。それで日本と日本人についてのイメージが作りあげられ固定化されます。これは本当によくありません。

私は、日本の政治家の妄言について論文を書いたことがあります。「戦後日本の歴史認識と妄言」中央日報統一文化研究所現代史研究部『日本の本質을 다시 묻는다』한길社、一九九六年、ソウル）、日本の政治家の妄言は高度の政治的行為です。彼等は、昔の話をしているわけではなく、今現在日本をどうするかというところで行っている政治行為です。

妄言というのは常識ではないことを意味します。政治家はその妄言を発して愛国者としての自分の存在を、マスコミを利用し宣伝するのです。過去の歴史を利用して政治活動を行うということです。それからもう一方で日本国民の意識教育をしています。愛国心という感情を煽って日本を右傾化、保守化させていきます。彼等が本当に日韓関係をこれからどうすればいいかと、前向きに考えていたら、こういうことはしないでしよう。自分が政治家として有名になるには、日本を右傾化するには役立つかも知れませんが、それは本当に反動的な政治活動であると思います。教科書問題も基本的には同じでしょう。

韓国のマスコミについて言えば、無責任に日本問題を取り上げてしまうことです。日本問題を、合理的に科学的に説明したらよいのですが、何も根拠なしに「日本は無条件に悪い」としてしまふんです。それは本当によくありません。たとえば、何年か前ですが、朝鮮王妃である閔妃を殺害した刀が、はじめて九州で発見されたということが新聞の一面トップ記事になったことがあります。私は閔妃殺害事件について論文を書いたことがあります。「三浦梧楼公使와 閔妃殺害事件」『明成皇后殺害事件』民音社、一九九二年、ソウル）、それは閔妃を殺害した刀ではないん

です。実際には、その刀の発見も最初ではないんです。私は一〇年前すでにわかっていたし、『東亜先覚志士記伝』という本にも、すでに書いてあります。

それで、ある新聞から、私に電話がきて、「多くの新聞で政治面あるいは社会面の一面トップになっているが、それについてどうお考えですか」と聞かれたのです。それで「これは初めてわかったことでもないし、嘘です。現在では閔妃を誰が直接に殺したかわかりません。殺害に参加した浪人たちが自慢話でよく自分がやったとしているんですが、それをそのまま信じることはできません。それから、発見された刀の持ち主は、殺害の現場に行っていないませんでした。だとすれば、その刀は殺害実行犯の刀ではなく、単に殺害事件に関係した人が所有していた刀ということになるでしょう」と答えました。その新聞は修正の小さい記事を書いたんですが、事実を知りながらもそのままにしまった新聞が多かったです。マスコミの習性ですか。それを読む読者はどう思うか。一〇〇年前の記憶が再生され、われわれの王妃を殺した野蠻な日本、日本人の像が強く刻印されます。感情を煽る行動でしょう。それは事実としても一面トップになるような記事でもないんです。文化面で書いたらいいものでしょう。

いま韓国のマスコミ、それを書く人々の考えかたには、観念的あるいは感情的な反日主義と商業主義が強く働いていると思われれます。無責任と言えます。過去志向の反日雰囲気はそれと関係あるのではないかと思うんです。

それから、商業主義に乗って、日本の低質大衆文化がよく流入しています。日本の高級文化、良質の文化ではなくて人間の原初的な感情を煽る扇情的文化、すなわちセックスとか暴力などを主題にする大衆文化が入っております。これは様々なところで問題を起こしてしまうのではないかと心配になります。というのは、韓国と日本の場合は文化的に人種的に、似ているところが多いんです。はっきり区別できないんです。たとえば米国からいろいろ低質の文化が入ったら、「あれは米国のものであるから」として、他者化してそれを拒否したり、また受け入れたり

選択できません。日本の場合は、はっきり他者化されていないからむしろ問題になってしまふんです。日本のそれをみて単線的に優劣の軸をもって評価してしまうんです。野蛮な日本人像がもっと定着してしまうのではないかと思われまふ。そして問題はただそこに止まらず、韓国のよい文化、良質の文化をだんだん墮落させていくこともありえるということですよ。悪貨が良貨を駆逐してしまうということでしょう。不健全な商業主義が韓日間の懸案です。私は経済専門ではないけれども、貿易の不均衡とか経済従属化の深化、この問題もただ一國エゴイズム的な立場ではなくて、前向きに共生・共栄のパラダイムで解決したらよいと思います。関係者のレベルでまじめに努力することを望みます。

五 課題と展望

これからの課題と展望の問題ですが、両民族はお互いに過去の歴史から解放されていないんです。長い歴史の中で両民族は必ずしも悪い関係ばかりを結んだわけではないんですが、むしろ長い間よい関係でやってきたんですが、近代に入って侵略と被侵略という不幸なものになってしまったのです。その後、この問題をきちんと解決したらよかったのに、先に申し上げたように政治的に利用されてしまい、いまだ我々は過去から解放されていないのです。これからは、二一世紀の新しい時代に向って、両民族は前向きに信頼を土台とする同伴者関係を築くために、共に過去の負の遺産を清算しなければならないと思います。

先ず日韓条約、韓日条約を改正しなければならぬでしょう。それが改正できなければ日韓において、真の過去の清算はありえないと思われまふ。法律とか条約は不変のものではないんです。悪いとしたら直すべきであるし、

それが本質でしょう。過去の歴史の中でも日本は日清戦争に勝った後、不平等条約を改正した事実もあります。韓日協定の中に漁業協定と在日韓国人の地位に関する協定がありますが、両国の必要によって改正されてきたんです。韓日基本条約は歴史的な事実と反するものであるし、冷戦構造のもとで南北分断体制を前提にしたものです。それから、それがもたなくなって不信と懸案解決の障碍になっております。すれば、改正するのが当然なことであると考えております。

その場合一番重要なのは、植民地の性格の問題です。一九一〇年八月二日に結ばれた併合条約は事実においても常識的にも武力をもって強制的に結ばれたものです。その条約は合法的なものでもないし、合意によるものでもないんです。日本帝国の朝鮮支配は源泉的に無効です。それをはっきり明文化した新たな条約を結ばなければならぬと思います。あわせて、その植民地時代に、特に一九三七年以後大陸侵略戦争の時、朝鮮人が強制的に戦争に動員されて犠牲と被害を被ったんですが、これについて正当な補償と賠償が行われなければならないんです。今の韓日条約が有効である限り、日本側は「過去清算」を前向きな立場でやりたくてもできない、ということなんです。その意味で条約の問題は根本的なものになります。

次に、過去に対する謝罪問題について申し上げます。近来多くの政治家たちが韓国に行つて過去問題について反省したり謝罪したりしています。細川さんも橋本さんも韓国に行つてやりました。年中行事のように「すまない、すまない」といっております。ところが帰国して、もし批判されると、そういうことを言ったことがないとか、そういう意味ではない、と言いながらまいにして避けてしまうんです。あるいは個人の意見であるとしてしまします。反面、ほかの政治家は妄言を喋ります。妄言と言えば、その内容は大体、「朝鮮民族救済論」「植民地美化論」「アジア民族解放のための大東亜戦争論」などでしょう。韓国人は政治家の謝罪の言葉が信じられないんです。言

葉遊びの彌縫策にすぎないと思うんです。日本は内閣制の政治システムだから、首相が行って謝罪しても、それが個人レベルの行動であつたら、意味がないんです。我々は、過去の問題について国会決議でもいいし、そうでなければ天皇が直接に反省と謝罪をしたらいいと思つています。天皇が過去の問題についてちゃんとした発言をすれば、妄言もなくなると思うんです。いま妄言を言う人々は大体右傾的保守的な天皇主義者でしょう。だから、天皇の權威は彼等には大変なものだからです。

過去の罪悪についての反省がどうして難しいのか、私にはわからない。過去に悪いことをしたが、申し訳ないと、はっきり反省して謝罪してもいいんじゃないですか。それはやっぱり構造的な問題、すなわち天皇制の問題にも関わっていることだから、簡単にできないのでしょうが、やっぱり常識的な立場でやったらいいんじゃないかと思うんです。

つぎに、歴史教育と歴史教科書の問題を取り上げたいと思います。韓国の場合も多くの問題を持っております。教科書に感情的な反日主義的な立場で書いてある部分もないとはいえないんです。その意味で韓国の教科書も直さなければならぬ。ただ、韓国は学問の分野でまだ日本よりは遅れているから、もっと韓日関係史とか日本史の専門研究者を育てるのが急先務といえます。ところが、日本の場合は事実がわかりながら書かないし隠してしまうことがあります。民族意識と歴史認識の教育のためと思ひながらそのようにしているのでしょう。忘却とか逃避ではやっぱり歴史から解放されることはできないと思うんですね。直視しながら新たな歴史をつくっていくということが大事でしょう。過去の歴史を反面教師と考へて正しい歴史認識をもつことが正しい韓日関係作りの基盤になるんです。

そのつぎに、人的交流が本当に必要です。私の場合も日本に来てから日本認識がいろいろ変わりました。今から

一五年前に『三千里』という雑誌で、日本の同じ世代の人々三人と座談会をやったことがあります（鶴園裕・中尾美知子・姜昌一「座談会・戦後世代のみた日本と韓国」『季刊三千里』四七号、一九八六年八月）。そのときは日本に留学したばかりでした。私は、日本は小さい島国であると、そういう教育を受けたんです。そして、日本人は野蛮という先入観をもっておりました。あまり礼儀も知らないし、人殺し好きである、戦争ばかりやる、本当に野蛮な国じゃないか、そういうイメージをもって日本に来たんです。私の小学校の時はそういう教育をしたのです。しかも成長してからも当時は日本歴史に関する本もなく、せいぜい関斗基編著『日本の歴史』（知識産業社、一九七六年、ソウル）という本だけでした。日本についての科学的、客観的認識というのは不可能だったんでしょう。座談会するとき、相互誤解が深いこと、我々の認識が事実に基づいていないこと、互いに客体として認識していないことなどがわかりました。その時までの私の日本に関する間接経験は、政治的な目的で作りに上げられたものによっていたから、今考えてみればマイナス側面が多かったと思います。日本を直接に経験して、実体としての日本がわかるようになる、他者として日本を理解するようになりました。

日本の方も同じだと思っています。最近特に若い学生たちがよく韓国を旅行しています。そして、韓国の学生たちとの交流も頻繁になされています。悪い面も見ながら親近感を感じて帰るようになります。政治のレベルで行ったり来たりする日韓関係ではなくて、国民レベルで、人間的レベルでいろいろな交流を深めていくことでしょう。これからは本当にいい関係になるのではないかと期待されます。

それからもう一つは、われわれは、互いに成熟した市民社会を作らなければならないということです。韓国の場合、民族分断体制がそれを妨げていて、もっと遅れていると思いますが、いちおうだんだんと民族統一と成熟した民主主義、市民社会に向かっていていると思います。日本の場合も、成熟した市民社会とはいえないと思います。特

に意識の面では、非科学的な天皇制の呪縛から抜け出ていないということも指摘できます。これは市民意識形成に邪魔になると思います。教科書の問題、歴史認識の問題、妄言の問題、過去清算の問題、それらはこのことと関わりがあると思います。天皇が世俗的な権力者としてだけではなく、宗教的権威をもって信仰の対象として神様のような存在になっていくから、天皇制の国家に人間の判断による歴史的法的責任を問うのは許されなはずです。それから、天皇を守らなければならないという右翼的保守的な政治勢力も鞏固に根付いています。それで、戦争の責任も天皇には問わない、植民地の問題も天皇には責任を負わせない、天皇は神様のような存在だから誤りというの有り得ないということでしょう。

両民族には互いに「全体原理」による国家主義が強く働いています。それは排他的で偏狭なものになり市民社会と市民意識の形成に邪魔になります。「個人の独立」を最優先の前提にする市民社会は、全体を中心とする国家主義によって変質してしまいます。歴史的に古典的な民族主義というのは人から始まって民族にまで拡大する道を辿ったんですが、我々にはアプリアリとして民族が位置づけられ、個人の独立を妨げる機能も果たしたんです。これをどのように解消していくのかという問題は、両民族の関係形成にも作用すると思います。

韓国と日本の間では普通、人と国を区別せずに、曖昧に一体化して認識することが多々あります。日本の国はこうであるから、日本人もみんなそうであると思うんですね。国家と個人のあり方というのは、緊張関係にもなり得るし、国民のあり方そのものがそのまま国家のあり方にならないこともあります。国家は独自のシステムによって動いていきます。ところが、この間でしばしば混乱が起こります。日本人は親切で偉いから日本という国も偉いとか、それなのに、どうして日本という国家は悪いことをやるのか、などなどです。きちんと市民教育をさせて国家と個人を区別する見方を身につけることも大事であると思います。

次に申し上げたいのは、最近いろいろ議論されているアジア的価値とか新アジア主義的な発想についてです。最近、東アジア三国でアジア共同体とか相互認識についての議論が活発になされています。そこで新アジア主義的な発想が多くあります。アジアは一つになって何かやりましょうという、そういうことです。最近米国でも「アジア的価値論」とか、「文明衝突論」とかが議論となっていますが、アジアの中でもそれに絡んで、アジアを一つの政治的あるいは経済的な圏域にしましょう、という主張が出ています。発想としては面白いと思いますが、多くの危険性をもっていると思います。アジアという範疇もそれぞれ作爲的であるし、その主張の背景もよく検討してみれば自国の利益を拡張するためのものとわかります。

東南アジアと韓国の関係を考えてみれば、あまりつながりがないんです。中国は東南アジアとつながりが強いんです。いまだ多くの中国人は自分の辺境として思うぐらいです。日本の場合も経済的に深い関係を結んでいるので、その地域が近いものとして自分の視野に入っていると思います。それで、もしかすると、それはアジア特に東南アジアをめぐるって、日本と中国の覇権争いに発展する可能性があると思われれます。こういう覇権主義的なアジア主義ならば、それはアジアの人民からいろいろ抵抗にあうと思うんです。

アジア主義というのは歴史的に失敗したものです。観念の上で作り上げられたアジア主義は大東亜共栄圏論に発展したんですが、それはアジア侵略の粉飾理論にすぎなかったことが証明されました。どうして失敗したかといえば、一国エゴイズムの観点でアジアを見るからです。むしろ、ナショナリズムを解体して人を中心においた上でアジアにまで拡大し、そして世界市民社会、そこまで拡大したら、成功したかも知れませんが、いまだにそのような発想はあまりみえないんです。いつも自分一国を中心に置いてアジアを見るんです。そうすれば、それは全体主義につながるんです。そういう危険性に目を向けなければ、再び一〇〇年前のアジアの覇権争いが行われるかも知れ

ません。

二〇〇二年のワールドカップ共同開催についてひとこと言いたいと思います。これからの韓日間では、我々がいま考える以上に交流が頻繁になっていくと予想されます。ワールドカップをきっかけにして、もっと自由に行ったり来たりするようになるでしょう。だとすれば、何の準備もなしに無責任に流れに任せてはいけません。ちゃんとした方針をもって方向性を提示した上で、交流を頻繁にしなければならぬと思います。

二一世紀は、国家を単位にする近代世界システムが解体され、ひと、情報、ものが自由に移動できる世界になるという展望があります。程度の差があるかも知れませんが、やはりそういう方向に向かうでしょう。国家は近代のように人を保護することができないし、また国家権力が人を統制することもできないでしょう。脱民族化、脱国家化が進んで行くでしょう。

それでもそれが人類にとってよい方向になるのかどうかは、様々な疑問がありえるし、必ずしもバラ色になるとはいえないのです。冷戦構造が終わった後の新しいパラダイムはどんなものになるか、新たな世界はどうなるか、それは現在生きている我々の責任です。再び戦争に走ったら人類は滅亡してしまいます。本当に共に生きていく共生・共栄のパラダイムを作っていかなければならないと思います。性別、皮膚の色、民族、宗教、地域、など無関係にともに生きうる世界と、そういう世界市民意識が切実に我々に要求されている時代です。日韓関係もこういうパラダイムの上で構築していかなければならないと思います。それは信頼を基礎にした共生・共栄の同伴者関係を作ることにあります。

以上で、ちょうど一時間になりました。ここで終わらせていただきたいと思います。長い時間、どうもありがとうございました。〔以下の質疑応答は省略〕

姜昌一氏略歴 一九五二年生まれ。一九八一年、ソウル大学校人文大学国史学科卒業。一九八三年、東京大学東洋史学科へ留学。一九九一年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学（韓日関係史専攻）。一九九一年、培材大学校（韓国・大田市）日本学科教授。一九九七年、東京大学文学部文化交流研究施設朝鮮文化研究部門客員研究員。

主要著作 『明成皇后殺害事件』 民音社、一九九二年、ソウル（共著）。歴史學研究所編『오늘날에 본親日問題와 日本의 "朝鮮侵略論"』 기림출판사、一九九三年、ソウル（共著）。民族問題研究所編『한일협정을 다시 본다』 亜細亜文化社、一九九五年、ソウル（共著）。中央日報統一文化研究所現代史研究팀『日本の本質을 다시 묻는다』 ハンギル社、一九九六年、ソウル（共著）。한국정신대연구회編『韓日間の未清算課題』 亜細亜文化社、一九九七年、ソウル（共著）。『日本史二〇一場面』 가람기획、一九九八年、ソウル（共著）。韓國精神文化研究院編『日帝植民統治研究』 一九〇五～一九一九 白山書堂、一九九九年、ソウル（共著）。

【講演当日に配布された資料】

1. はじめに

* 主要事件

- 1945. 8. 15. 一敗戦と解放
 - 1948. 一南北分断、(韓国)「親日派」の再登場、(北韓)「親日派」粛清
 - 1950. 一朝鮮戦争
 - 1960. 一4.19 革命
 - 1961. 一5.16 軍事クーデター、「親日派」の権力掌握
 - 1964. 一(日本) オリンピック一交流の始まり
 - 1965. 一韓日条約(国交再開): 亡国的・反歴史的条約として国民的抵抗
 - 1972. 一維新体制
 - 1973. 一金大中拉致事件
 - 1974. 一民青学聯事件と文世光事件
 - 1980. 一全斗煥軍事政権一ハングル世代の登場一「克日論」
 - 1982. 一教科書問題発生
 - 1988. 一ソウルオリンピック一(日本) 好奇心の高揚、認識の転換点
 - 1989. 一軍慰安婦問題の台頭
 - 1995. 一(韓国) 解放と(日本) 敗戦の50周年、「妄言」の続発と反日雰囲気の高調
- 最近一領土(独島)問題、排他的経済水域問題、北の核開発と食糧問題、日米防衛協力のための新指針

2. 解放以後、韓国における日本認識

- 第1世代(植民地世代)一虚偽的反日主義と感情的反日主義の錯綜一「自己内部化」(他者化されない)、ノスタルジャと劣等意識一盲目的反日教育(「悪玉」としての日本)
- 第2世代(ハングル世代; 4・19、6・3世代)一民族主義の高揚一観念的反日主義、一克日論(日本無知と軽視)一「重米軽日」
- 第3世代(そのあと)一日本(経済大国化)についての関心高揚一「知日論」あるいは「モデル論」一日本賛美論と日本警戒論の混在と併存
- 第4世代(X世代)一他者としての日本観と認識一没主体的・脱歴史的日本認識一「羨望論」一観念と現実の乖離、意識と感情の対立、混乱

3. 敗戦以後、日本における韓国認識

- 第1世代(旧日本の青壮年層)一「自己内部化」、日本の周辺としての韓国一蔑視・差別観

第2世代（戦後、青少年教育）—蔑視・差別観と加害者意識が混在、反韓国・親北韓

第3世代（戦後生まれ）—客観的・脱歴史的韓国認識—無知、無視、無関心

第4世代（経済成長期以後出生、新人類）—亜細亜への関心の高まり、他者としての韓国、成長の韓国—歴史関係についての無知と好奇心—親韓国・嫌北韓

4. 韓日間の懸案問題

- * 韓国の親日派権力と日本の保守・右傾的な政治家との癒着—歴史問題の政治的利用—「韓日条約」
- * 「過去清算」の課題が未解決のまま—植民地支配に対する謝罪の問題、戦争被害者に対する報償の問題、歴史教育の問題、領土問題など
- * 「教科書問題」と妄言の続発—潜在記憶の再生、意識化—観念的日本観（「悪玉」）の定着
- * 日本政治家の妄言—高度の政治運動—歴史の歪曲、保守化・右傾化をねらって—反動的
- * 韓国のマスコミ—反日感情の扇動行為
- * 商業主義に乗った日本低質文化の流入—無自覚的な受容
- * 貿易不均衡と経済従属化の深化

5. 課題と展望

- * 相互間、過去の負の遺産清算の課題—21世紀に向けて望ましい関係の定立のために
 - ・ 韓日条約の問題—反歴史的な条約内容—改正の必要
 - ・ 日本天皇のはっきりした謝罪と妄言の根絶など
 - ・ 歴史教育の正常化—不安と警戒、憂慮—教科書問題など—歴史からの解放とは忘却とか逃避ではいけない、直視してから反面教師として学ぶ
- * 人的交流が必要—直接体験によってお互いの認識を深める—真正な理解
- * 国家と人間の問題—成熟した市民意識と社会—（日本）天皇制の呪縛からの解放、（韓国）偏狭的民族主義からの解放
- * 世界化の流れ—脱国家化、脱民族化の傾向—代わりにアジア圏域論（「新アジア主義」）の台頭—危険な発想：・1国エゴイズムの延長線の上で為されている・地域範疇の作為性・中国と日本の覇権争いの可能性
- * 人類共有の普遍的価値とパラダイムの模索—共生共栄（相生の原理に基づいて）
- * ワールドカップ（2002年）—交流の頻繁—はっきりした方向性の提示が必要